

年間第三十主日（A 年主日の福音を中心とする「靈的な読書」）

（一）聖書朗読：マタイ 22：34-40

その律法の専門家が、イエスを試そうとして尋ねた。「先生、律法の中で、どの掟が最も重要でしょうか。」イエスは言われた「第一の掟は、心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。第二では、隣人を自分のように愛しなさい。律法全体と預言者は、この二つの掟に基づいている。」

（二）カテキズムの響き（カトリック教会のカテキズムの番号、主に #1824、2054-2055、2083；他に #368、1968、2563；YOUCAT #309、350-352）

イエスは十戒を踏襲されます。しかし、十戒の文字を通して働かれる霊の力を明らかになさいます。イエスは、律法学者やファリサイ派の人々の者にまさる義について説かれました。これは心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。また、隣人を自分のように愛しなさいということです。この言葉は人間が神に捧げるように招かれている愛の応答を明らかにしています。十戒は、二つでありながら唯一の掟であり、律法の充満であるこの愛の掟に照らして理解されるべきもののなのです。

愛徳というのは霊の実り、律法の完成です。キリストの福音は律法の掟を完成させます。行為の源である心を徹底的に改めさせようとします。また、信仰と希望と愛が、そしてこれらとともに他の諸徳が培われるのも、この心においてなのです。こうして、福音は天の御父の完全さに倣い、神の寛大さに倣って敵を許し、迫害する者のために祈るという方法を通して、律法を完成に導くのです。だから、愛は律法から出るものではなく、心から現されるものです。心は人間のもっと深いところを意味しており、これによって、人は神を受け入れるか拒否するかを決定することになるのです。ただ神の霊だけが、それを探り知ることがおできになります。さらに、心は、神の似姿である人間が神と真正面から見つめ合う場、つまり、契約を交わす場です。

（三）カテキズムの学び（『コンペンディウム』カトリック・カテキズム要約の番号）

#434-435、437：

イエスは愛の契約に照らして、十戒という律法を解釈し、神への愛と隣人への愛という掟を示します。

最後の祈り：

「二つの愛の掟」及「黄金律」を宣言して、「神を愛する祈り」を唱えます。

（『コンペンディウム』の付録の A と B の参考）